

# みやこの 近代

72

高階 絵里加

明治二十年代末から三十年代初頭にかけて、東京美術学校を中心とする洋画と日本画の動きに刺激を受けて間接的にヨーロッパ美術を学び、新しい大気・空間表現の創出に意欲を見せた栖鳳であったが、おそらくは明治三十三(一九〇〇)年の渡欧をきっかけに、独自の空間描写をめざすようになる。岡倉天心は、日本画に西洋画法を取り入れるために線描を廃するという実験的試みを行い、さらに画材そのものの改良まで考えたこともあった。これに対して栖鳳は、西洋美術を美見した結果、墨や岩絵具の持つさまざまな可能性を探求

## 栖鳳と日本絵画の革新 ④

すること、西洋絵画のある部分は日本画に取り入れることができると直観した。そのような研究の成果の一つに、セピア色の背景がある。栖鳳は、具体的な背景を描かずに対象をリアリティーのある空間に置くために、セピアの濃淡を用いる独特の方法を考え出した。たとえば、明治三十四年ごろの作とされる四曲一双の「金獅」では、座一頭の獅子が、あたかも猫がするように首を後ろに向けて、左後ろ足の先を舌で舐めている。まるで金の細い糸が集まって内側から輝きを発しているような感じとなたてがみの表現(実際には金

色は使われていないが、題名からもわかるように、少し離れると黄金の輝きにみえる)や、四曲屏風のちよと中央に大きな二等辺三角形になるように獅子にポーズをとらせるという、きわめて

安定した構図の巧みさに加えて、ここには、微妙な濃淡によるセピア色の背景のみでこの獅子のいる空間を決めている点が、瞬間をとらえたポーズと相俟って、迫真性と臨場感を生み出している。左

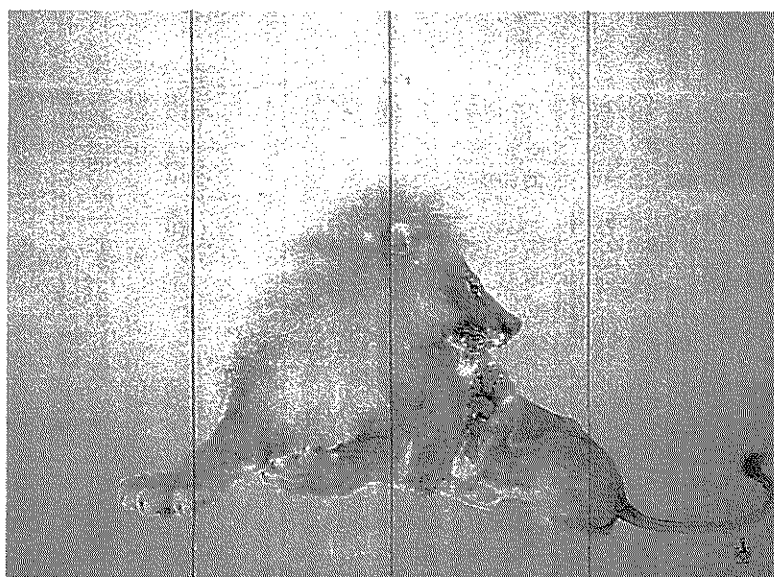
後ろ足を挙げて体をねじるといふ不安定なポーズのバランスを取るために、猛獣は右前足を手前のほうに出してぐっと押し付けている。観る者がこの右足の重みを感じた瞬間、セピアの色面は固

い土の地面へと、魔術のように変貌を遂げる。説明的な描写は一切ないが、この屏風の向こう側にはまきれもなくもうひとつの空間があり、獅子はそこに、ある容積と重さとを占めている。

このようにして、栖鳳は、金地や東洋的主題という方向ではなく、日本画の技法による体感的な空間表現のさらなる探求へと進んだ。水墨のみによるそのような表現の一つの

到達点を示すのが、「ヴェニス」(京都大学助教・近代美術史) 月であったといえる。岡倉天心も、これからは色の代用としての墨の研究が主に必要である、との考えを持ってはいたが、「此方で墨画をやるにしても、彼地のスケッチより一段妙趣のあるものにならねばなりません」と決意した栖鳳のほうが、むしろ日本画そのものの伝統の中から、西歐近代絵画に匹敵する墨の可能性を示してみせたといえる。「一方で西洋人の賞賛する所と、日本の洋画を見て日本画に猶色々な光線陰影などを加えやうといふ、其の中間に一つ空隙があつて、そこが色々研究する場所であらうかと思ひます」という栖鳳の冷静的確な判断は、写実の精神の伝統をもち、なおかつ西洋の衝撃に直接さらされることのない、あつてこそ、ありえたと

## 技法の探究から可能性を示す



竹内栖鳳「金獅」

(明治34年)。株式会社ポークス所蔵